

一次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

この章では、評論について書いておこう。

小説家で自作解説をする人がたまにいる。ぼくは「ちよつとな……」と思う。なぜそんなふうに思うのかと言うと、一つは「ぼくの自由に読ませてよ」と言いたいからだ。もう一つは、自作解説ができるほど言いたいことがはつきりしているなら、なにも小説などという回りくどい表現形式をとる必要はなかったではないかと思うからだ。はじめから評論を書けばよかったのだ。

小説は言葉を使ってこの世界に似せたイメージを作る表現形式である。世界はそれ自身では主張を持たないから、ぼくたちは小説を「自由」に解釈できる。それが、小説を読む楽しみだ。ところが、評論はそうではない。古典的名著ともなれば評論でもさまざまな解釈が競われることがあるが、ふつうは評論の主張ははつきりしている。「自由」に解釈すれば「誤読」となることが多い。

では、ぼくたちはなぜ評論を読むのかと言えば、それは自分の知らないことやわからないことを、知りたいしわがかりたいからだ。それが知的な虚栄心というもので、これがなくなったら精神的な「老人」である。精神的な「若者」は、友人が本を読んだと聞けば、たとえ自分が読んでない本であっても「読んだよ」と答えるものだ。そして、あわてふためいて本屋さんか図書館に行つて、わかつてもらわなくても一晩でそれを読んで、翌日には涼しい顔をして「そう言え、あれはたいした本じゃないね」なんて言ってみるものだ。そんなふうにして、ぼくたちは教養を身につける。

ぼくは「教養」という言葉を二つの意味でとらえている。一つは知識の量で、これは多ければ多いほどいい。しかし、これは少し古風な教養のとらえ方である。現代ではあまりに多くの情報があふれているからとても追いつけない。その上に過去のことまで知っていなければならないとしたら大変だ。もちろんそのための努力は大切だが、限りがある。そこで二つめの教養の意味が必要だと考えている。それは、物事を考えるための座標軸をできるだけたくさん持つことだ。「たくさん」とは言っても、ぼくたちの思考方法にはその時代ごとに流行があるから、これは無限というわけではない。ぼくは、その時代に必要なる思考方法を身につけることを第二の教養、そして現代の教養と呼んでおきたい。この現代の教養を身につけるために評論を読むのである。

ふつう「評論は、筆者の言いたいことを読解すればいい」と考えている人が多いと思うが、実は評論を読むにもコツがある。ただし、これは「評論早わかり」という類のものではない。具体的には、評論にも「内包された読者」の位置が用意されているということなのである。ごく簡単に「身も蓋もない言い方をすれば、ふつうはこう思っているだろうが、ぼくはこう思う」と書くのが評論である。実際、たつたいま書いたぼくの文章がそうになっているではないか。

この「ふつう」の位置が「内包された読者」の位置だ。そう、ちよつと「I」を演じるのが、評論を読むコツなのである。そうすると、「へえ、そうだったのか」という具合に評論が面白く読める（これもある）。具体例を見ておこう。

じぶんの身体からだというものは、だれもがじぶんのもつとも近くにあるものだとおもっている。（中略）ぼくとはほかならぬこのぼくの身体のことだと言いうるほどに、ぼくはまちがいにぼくの身体に密着している。ところが、よく考えてみると、ぼくがじぶんの身体についてもっている情報は、ふつう想像しているよりもはるかに貧弱なものだ。身体からだの全表面のうちでじぶんで見える部分というのは、ごく限られている。さっきもふれたことだけれど、だれもじぶんの身体からだの内部はもちろん、背中や後頭部でさえじかに見たことがない。それどころか、ましてや自分の顔は、a シュウセイイ見ることができない。ところがその顔に、じぶんではコントロール不可能なじぶんの感情の揺れが、b ロシユツしてしまう。なんとも、ムボウビなのだ。

（鷗田清一『ちぐはぐな身体』ちくま文庫、二〇〇五・一）

いま傍線を施したところに、「ふつう」の読者の位置が、すなわち「内包された読者」の位置が明確に示されている。たぶん、鷗田清一は「ふつう」の人は①「自分の身体のことなら自分が一番よくわかっている」と思っている。それを前提として②「いや、実は自分の身体ほどわかりにくいものはないのだ」と説いているのである。そこで読者が「なるほど」と思えば、鷗田清一の勝ちである。この文章は、前章で述べた「二項対立」が利いている。《既知の身体／未知の身体》という図式である。「ふつう」の読者は①《既知の身体》の側にいて、鷗田清一は②《未知の身体》の側にいることになる。

①はいわば常識と言える部分で、②はそれに対する批判的検討（批評）だと言える。評論はこの二つの要素がうまく組み合わさってはじめて成功するのである。つまり、二項対立をうまく使うことが評論を読んだり書いたりするコツなのだ。一番はじめなのは①の常識の把握が間違ってしまった場合で、これがズレていると、何に對して異議申し立て（批評）を行っているのかサッパリわからないようなピンぼけの文章になってしまう。次にみじめなのは、②の批判的検討（批評）が実は常識そのものでしかなかった場合で、実に凡庸な評論になってしまう。たとえば、「ふつうは自分の身体からだのことはよくわからないと思っているだろうが、実は自分の身体からだのことは自分が一番よく知っている」という構成になつていたら、前半は「なにわけのわからないこと言ってるの？」となつて、後半は「当たり前じゃん」ということになつてしまうだろう。

この点に関して、フリーライターの永江朗が面白いことを言っている。新聞の読者投稿欄によくある「ゴミを捨てるのはよくない」とか「電車では老人には席を譲ろう」といった文章は、わが新聞は「こういうつまらないふつうの人々が読んでいるんですよ。みなさん、ご安心下さい」（傍線、石原）というメッセージであつて、お金をもらうための文章ならば「ゴミを捨てる人の仕事が増えるのだからゴミをどんどん捨てよう」とか「II
「ぐらいいことは書かないとダメだと言うのだ（『不良』のための文章術）NHKブックス、二〇〇四・六）。

まったくその通りだ。もともと新聞は「ふつう」の人に向けて作られているのだから当然と言えば当然で、「ふつう」でいいのだが、評論でプロになるためには「ふつう」ではダメなのである。それでいて「ふつう」がよくわかっていないければならない。つまり、評論とは「ふつう」がよくわかっていない人が「ふつう」でないことを書いた文章なのだ。その意味で、鷗田清一の文章はみごとに評論になっている。そして、「ふつう」の読者のふりをしたぼくたちも、4 みごとに成功したわけだ。

（石原千秋『未来形の読書術』より）

問1 線a cのカタカナを漢字に改めなさい。

問2 線1「身も蓋もない」、線2「利いている」の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|----------|-----------|------------|-----------|
| 1 | ア | どうしようもない | イ | はつきりとしすぎた |
| ウ | 大まかな | | エ | 親切な |
| 2 | ア | 役割を果たしている | イ | 群を抜いている |
| ウ | 理解を助けている | エ | 調和をもたらしている | |

問3 I に入ることはとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おばかさん イ おりこうさん ウ おませさん エ おてんばさん

問4 線3「鷺田清一は②（未知の身体）の側にいる」とはどのようなことですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 鷺田清一は、常識的な考えを超えて、非常識な結論を述べているということ。

イ 鷺田清一は、常識的な考えをなおざりにして、常識的でない意見を述べているということ。

ウ 鷺田清一は、常識的に考えられることをふまえて、常識的でないことを述べているということ。

エ 鷺田清一は、常識的に考えてわかることを、まるで非常識なことのように述べているということ。

問5 線4「みごとに成功した」とありますが、これはどのようなことを言っているのですか。文中のことはを用いて、十字以内で解答欄に合うように書きなさい。

問6 II にはどのような文が入りますか。本文をふまえて二十字以上二十五字以内で書きなさい。

二 次の文章は、不登校のために毎日公園のベンチにいる主人公（雄吾）が、廃品回収の老人（源ジイ）と出会ったときの様子を描いたものです。これを読んで、後の問に答えなさい。

軽トラックは座席のしたにエンジンがあるようで、座ったとたんにほっとするようなあたかさだった。小雪の散る住宅街の路肩をハザードランプをつけたまま、歩くほどの速度でのんびりと流れていく。新小川町、東西の五軒町、山吹町に早稲田鶴巻町に弁天町。どこか昔の雰囲気のある新宿の下町を、雄吾と老人はとおりすぎた。（中略）老人は話し好きなようで、どんなことをして生きてきたかをおもしろおかしく話してきかせた。

「おい、うちの力カアの写真見せてやるよ」

老人はそういつて、ハンドルから両手を離し、ジャンパーから財布を取り出した。（中略）笑っているのはわかるが、顔の細部がはっきりしないフォークスのぼけた写真だった。

「どうだ、美人だろう」

雄吾はうなずくことしかできなかった。（中略）手放し運転で写真を財布に収めるとき、ちらりと札幌の中身がのぞいた。十万円ずつ束ねられた紙幣がふた折。雄吾の表情が変わったのがわかったらしい。

「ああ、こいつか。昔の商売のせいで、まとまった金をもつてないとなんだか落ち着かなくてな。兄ちゃん、ノミ屋って知ってるか。酒のむ店のことじゃあ、ねえぞ」

きいたことのない言葉である。黙っていると、老人はいった。

「なあ、兄ちゃん、そうやって黙っていられると、話をしても張りがねえ。あーでもうーでもいいから、なにか返事をしてくれよ」

うーという代わりに雄吾はいった。

「ノミ屋はわかりません」

老人は金歯を舌の先でなめていった。

「そりゃあ、そうだよな。学校じゃあ絶対に教えてくれない裏稼業だからな。要するにJRA（日本中央競馬会、競馬のレ-

ス並びに収益を管理するに無断で客に馬券を売って、儲かった分は全部ボツにいちれちまう仕事だよ。ギャンブルだからたいていは、JRAが儲かるようにできてるんだ。けどな、一年に何回かはツキが落ちることがあつてな」

信号の先で男が手を振っていた。老人は軽トラックをとめると、ドアを開けた。

「兄ちゃんもいつしよにきてくれ」（中略）

荷台にワイドテレビを積みこんで、また流しが始まった。老人はいう。

「さっきはどこまで話したかな」

雄吾は息を切らしていた。力仕事などめつたにしたことはなかったのだ。

「ノミ屋をやっているツキが落ちたときのこと」

老人は金歯をむきだして、笑いかけた。

「なんだ、兄ちゃん、ちゃんと話せるじゃないか。あのなツキが落ちるときっていうのは、ちゃんとまえばれがあるんだ。ノミ屋でも一日のノルマがあるからな。あと一息で目標額達成なんて日の最終レースがあぶねえ。またそんなときに限って、しびれるような馬券を買いにくる客がいるんだ。で、だいじようぶだろうとのんじまうと、その馬がきちまう。しかたねえから、うちの力カアに電話して、あわてて銀行から何百万もおろしてこさせるんだ。ああいうのは、なんだな。どんなにわかっていても、避けられねえもんだな。黙って損するよりねえ」

十三歳の雄吾にとってノミ屋の話など夢物語のようだった。百万円という金額も考えられない大金である。それでもツキの話は、どこか自分にも理解できることのような気がした。雄吾は初めて自分から口を開いた。

「そういう悪い運で、あぶない勝負を受けなければ、だいじようぶなんでしょう」

雄吾の頭のなかには、公園のベンチで座る自分の姿があった。あそこには続けることで、自分はいくかすると、悪いレースのチケットを買わずにいるのかもしれない。

「わからんな。一度、兄ちゃんのいうとおり、あぶない勝負は全部おりのことがあつたよ。だがな、そうするとしばらくはいいんだが、儲けのほうもジリ貧になつちまつた。安全に安全にとやつたつもりだが、あとでドデカイ一発をくらつて沈没したしなあ」

老人はなにを考えているかわからない顔で、雪のちらつく通りを見ている。

「おれは兄ちゃんがどうしてひとり公園にいるのかは、わからねえ。けどな、ときには自分を折るのも大事だぞ。毎日すこしずつ負けておく。そうしておく、最悪の事態はなんとか避けられるもんだ」

雄吾は自分の未来に起こりうる最悪を想像しようとした。しかしそれはうまく像を結ぶことができなかった。雄吾はまだなにかをほんとうにほしがったことも、失ったこともなかったのである。老人とは反対側の歩道を見ながらいった。

「あの、こういう仕事にもなにか資格が必要なんですか」

冗談でもきいたように老人は歯を見せて笑った。

「運転免許があればだいじようぶだ」

雄吾は真剣にいった。

「じゃあ、ぼくはいつかこの仕事をやりたいです。ひとりでするし、目立たないし。明日からも手伝わしてもらえないでしょうか」

老人は首を振りながらいう。

「かまわねえよ。でも、兄ちゃんはほんとに変わった兄ちゃんだな。名前は」

背筋を伸ばして、雄吾はいった。

「川本雄吾です。よろしくお願いします」

老人もハンドルをにぎりながら、頭をさげた。

「八坂源一だ。おれのほうこそよろしくな」

翌日から朝九時半に公園で待ちあわせるのが、習慣になった。源ジイはろくにバイト代も払えないからといって、毎日おにぎりを用意してくれた。雄吾は助手席で、ときに課題の本を読むこともあった。源ジイは感心したようにいう。

「雄吾は本読むの速いんだな」

その週、雄吾の父の選択は坂口安吾の『墮落論』とジョージ・オーウェルの『パリ・ロンドン放浪記』だった。

「どうだ、どっか、おもしろいところはあるかい」

雄吾は読んでいた『青春論』の一部を読みあげた。

「この政治家は子供に向かって、まともな仕事をするな、山師になれ、ということをやたら言っていたそう、株屋か小説家になれと言ったそうだ。」

源ジイは車内に響く笑い声をあげた。

「そうか、山師か。そうなるとおれたちも、おえらい作家先生も変わんねえな。なんたつて、こっちはのんびり流してただけで、お宝のほうから声がかかるんだからな。なにがあたりかわからねえのもよく似てる」

雄吾と源ジイの奇妙なコンビは、一年で一番寒さの厳しい二月の二週間をのり切った。そのあいだ雄吾は、すこしずつ家庭環境と不登校の理由を伝え、源ジイは遠くに住む息子とひとり暮らしの日々を話した。

雄吾はこのまま中学を辞めてしまっても、源ジイの廃品回収の仕事を手伝ってあげたいのではないかとぼんやり考えていた。お金にはあまりなりそうもないけれど自由で、いつでも自分の好きな街を見ていられるのだ。悪い仕事ではなかった。

だが、そんな雄吾の計画を吹き飛ばすような出来事が突然やってきた。悪い運が楽しい日々の代償を取り立てにきたのである。(中略)

その後、源ジイは廃品回収の作業中に脳血栓(脳の血管に血液の固まりがつまる病気)で倒れ、雄吾が救急車を呼んで緊急入院をする。雄吾は源ジイのひとり息子に電話をした。

翌日から雄吾の仕事は、廃品回収から源ジイのつきそいに変わった。電話を受けた老人のひとり息子は、仕事がいそがしくて週末まで東京にこられないといった。入院に必要な寝巻きやタオルや下着などは、病院の売店ですべて雄吾が買ってきたものだ。

入院二日目には、雄吾の両親も老人の見舞いに顔をだしている。源ジイはふたりのまえでは、雄吾のときは別人のように話した。

「すみませんです。息子さんが毎日公園にいるものだから、つい仕事の手伝いなんかをさせてしまつて。X」

の始末です。天罰つてやつかも知れません」

真治は黙っていたが、亜希子が口を開いた。

「いえ。うちの子もちょっと変わつていて。八坂さんの仕事を手伝うようになってから、家でもまえより明るくなつて

いたんです。このごろちょっと変わったねって、夫とは話していました」

源ジイは照れたように笑ったが、真治の声は真剣だった。

「残念ですが、雄吾はまだ中学生です。アルバイトとしてつかうのも、こうして血のつながりのない八坂さんを看病する

のも、どういへばいいか、適切ではないと思います。雄吾のつきそいは、息子さんがY週末までいいでしょう」

上半身をベッドに起こした老人は、何度もうなずいてみせた。

「わかつております。そのあとは、ちゃんと雄吾くんはお返ししますから。ご安心ください」

その場にいた雄吾は、誰も自分の意見をきかないのが不思議だった。十三歳というだけで、透明人間にでもなったような気がする。口のなかでつぶやいた。

「同じじゃないか」

亜希子が振り返った。雄吾が今度ははっきりといった。

「同じじゃないかっていったんだ。どうせ公園のベンチにもどるなら、この病院の廊下の長いすに座っていても同じだよ。どっちにしても学校にはいかないんだから」

そのときベッドの老人が、腹から太い声をだした。

「おい、兄ちゃん。親御さんにそんな口をきいちゃいけない」

雄吾は三人の大人を交互に見てから、黙って病室をでていった。

【石田衣良「夕日へ続く道」(『約束』所収)による】

問1——線1「なあ、兄ちゃん、そうやって黙っていられると、話をしても張りがねえ」とありますが、黙っている雄吾の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- A 赤の他人である自分を車へ乗せてしまう老人を警戒している。
 イ 金持ちでなさそうな老人が大金を持っていた意外性に感心している。
 ウ ノミ屋のことは分らないけれども、自分に知らないことがあるのを認めたくない。
 エ しばらく不登校だったこともあり、老人が次々と話しかけてくることに戸惑っている。
 オ 老人が妻の写真を見せて、一方的に美人であると認めさせようとしたことに憤っている。

問2——線2「あそこにい続けることで、自分はおかしな人と、悪いレースのチケットを買わずにいるのかもしれない」とは、どういうことを言っているのですか。次のことばを必ず用いて、四十文字以上四十五文字以内で説明しなさい。

いやな思い

問3——線3「雄吾と源ジイの奇妙なコンビ」とは、どんなコンビですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- A 父が課題としたいろいろな本を読む雄吾を源ジイが茶化してしまふ、どこかぎくしゃくとしたコンビ。
 イ 本から得ただけの雄吾の知識に源ジイが実感のこもったコメントをする、意外とかみ合ったコンビ。
 ウ 雄吾が株屋や小説家になることを源ジイが明るく後押ししてくれる、笑いの絶えないコンビ。
 エ 運を頼むばかりの源ジイの生活に雄吾が共感をよせる、不思議とつり合いのとれたコンビ。

問4——X、Yに当てはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- X A 立て板に水で
 ウ 泣きつ面に蜂で
 Y A おみえになる
 ウ ご覧になる
 X A 立て板に水で
 ウ 泣きつ面に蜂で
 Y A おみえになる
 ウ ご覧になる
 X A 立て板に水で
 ウ 泣きつ面に蜂で
 Y A おみえになる
 ウ ご覧になる

問5

次の文章は、この小説の内容の一部を要約したものです。A Dに当てはまる最もふさわしいことばを指定された字数で本文より書き抜きなさい。

雄吾には、本当に欲しいものも、失いたくないものもなかった。そんな雄吾にとって、場合により A・
[五字] 必要もあるという源ジイの話は実感がわかないものであった。入院した源ジイのつきそいをする雄吾であつたが、週末までしかつきそいをしてはいけなさと勝手に決められたことに B・十三字 違和感を覚える。源ジイと過ごした C・五字 は、雄吾の失いたくないものだったと言えるだろう。この点で、雄吾は確実に変わつていったのである。しかし、赤の他人である源ジイの世話を学校へも行かずにすることは、世間的に許されるものではない。そうした父をはじめとする D・二字 の常識を前にして、雄吾は苦しんだのだつた。

「以下余白」